『徒然草』における漢籍受容の方法
――第二十五段「桃李もの言はねば」をめぐって――

黄　昱

要旨

『徒然草』第二十五段は、京極殿と法成寺を例として世の無常を説く章段である。その中の、「桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん」という無常を感嘆する文章は、「桃李不言、下自成蹊」という漢籍の故事を踏まえている。しかし、桃李はものを言わないが、花と実のために、その樹の下に自ずから人が集まってきて小道ができるというこの故事の原意とは意味も用法も異なっている。そこで、この表現が、もともとの意味から離れて、懐旧の思いを語るものに変遷していく経緯を中国と日本の古典作品に見られる用例にそって考察を行う。

たとえば、近世の諸注釈から、『徒然草』の注釈書は、この文章の出典として、『和漢朗詠集』菅原文時の漢詩「桃李不言春幾暮、煙霞無跡昔誰栖」と、『後拾遺集』出羽弁の和歌「ふるさとの花の物いふ世なりせばいかにむかしのことを問はまし」をあげている。また、朗詠古注の『永済注』と『平家物語』巻三「少将都還」は、この漢詩と和歌を並べた形であげている。ここでの「桃李不言」の表現は『徒然草』と同じ、懐旧の思いを詠み込んだものである。こうして、この表現を懐旧の意味で使う傾向は中国の漢詩の中に見られ、かなり早い段階から日本漢詩にも見られた。また、和歌においても、「桃李不言」の故事を踏まえて懐旧の思いが詠まれるようになっているのである。

このように、この表現は原典の意味から離れて、中国と日本の漢詩文、さらに和歌においても、懐旧の思いを詠む用法が

現れ、複雑な変遷の経緯を経ている。こういう出典を用いる時、原典からではなく、変容した形のものを取り入れる間接的な受容方法は、『徒然草』の漢籍出典を考える時には、看過できないものである。

一、『平家物語』と『永済注』の影響

「飛鳥川の淵瀬、常ならぬ世にしあれば」から始まる『徒然草』第二十五段は、藤原道長の京極殿と法成寺を例にあげて、無常を説く章段である。奢侈を極めた邸宅も今は見るだけでも悲しくなるほどに荒れ果てていることから、死後のことまで心を尽くして配慮するのは、むなしいことだと兼好は語っている。少し長くなるが、第二十五段の本文を引用しておきたいと思う。

飛鳥川の淵瀬、常ならぬ世にしあれば、時移り、事去り、楽しび・悲しびゆきかひて、花やかなりしあたりも人すまぬ野らとなり、変らぬすみかは人改まりぬ。桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん。まして、見ぬいにしへのやんごとなかりけん跡のみぞ、いとはかなき。

京極殿・法成寺など見るこそ、志とゞまり、事変じにけるさまは、あはれなれ。御堂殿の作りみがゝせ給ひて、庄園多く寄せられ、我が御族のみ、御門の御うしろみ、世のかためにて、行末までとおぼしおきし時、いかならん世にも、かばかりあせはてんとはおぼしてんや。大門・金堂など近くまでありしかど、正和のころ、南門は焼けぬ。金堂は、そののち倒れふしたるまゝにて、とりたつるわざもなし。無量寿院ばかりぞ、そのかたとて残りたる。丈六の仏九体、いと尊くてならびおはします。行成大納言の額、兼行が書ける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法華堂なども、いまだ侍るめり。これもまた、いつまでかあらん。かばかりの名残だになき所々は、おのづから礎ばかり残るもあれど、さだかに知れる人もなし。

されば、よろづに見ざらん世までを思ひ掟てんこそ、はかなかるべけれ。(1)

建築物の無常から世の無常を連想するのがこの章段の発想である。無常を説く文章は古来おびただしく存在しているが、その中でもこの章段は印象に残る美文である。たとえば、冨倉氏は「人生無常を描いたエッセイとしてわが文学中の第一流の文章といえるであろう」と絶賛している。[2] 冒頭の「飛鳥川の淵瀬、常ならぬ世にしあれば」の一句は、『古今集』読人しらずの歌「世中はなにかつねなるあすかがはきのふのふちぞけふはせになる」（巻第十八・雑歌下）、伊勢の歌「あすかがはふちにもあらぬわがやどもせにかはりゆく物にぞ有りける」（巻第十八・雑歌下）、読人しらずの歌「あすかがはふちはせになる世なりとも思ひそめてむ人はわすれじ」（巻第十四・恋歌四）[3] と『枕草子』の「河は」の条「河は飛鳥川、淵瀬も定めなく、いかならんとあはれ也」[4] を想起してつづられたものだと『寿命院抄』からの諸注釈に言われるように、この章段はさまざまな古歌や古詩の先行古典作品を踏まえて書かれたものである。就中、傍線部の文章「桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん」があるが、これはよく知られている漢籍の故事「桃李不言、下自成蹊」を借りて、旧邸懐旧の思いを述べたものである。「桃李不言、下自成蹊」というのは、『史記』、『漢書』に出てくる李広将軍に関する故事である。桃李はものを言わないが、美しい花と美味しい実があるために、その木の下には自然に人が集まってきて小道ができるという意味で、無口だが、人徳があるために、人々に敬愛されている李広将軍を讃えることばとして知られている。しかし、この故事とそれを踏まえた第二十五段の文章とは必ずしもダイレクトにはつながらないようである。そこで、本論では、その典故を中心に述べてみたい。

第二十五段の「桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん」という文章の出典について、『寿命院抄』は「桃李不言春幾暮、煙霞無跡昔誰栖」[5] という『和漢朗詠集』巻下・仙家に見られる菅原文時の漢詩をあげており、『埜槌』は同じ秀句をあげたほか、「史記ノ李広ガ伝ノ賛ニ。桃李不レ言下ヲ自成レ蹊ヲ」と、前述した李広伝の故事を引用している。『慰草』は『埜槌』と同じように、両方をあげている。

『盤斎抄』は「これは古事をもちてかく也。松もむかしの友ならぬなどいひふるしたるに。かく書事おもしろき筆法。一転語奇妙なりといへり」と述べたほか[6]、李広伝の記事は『漢書』にもあると指摘し、『埜槌』があげた『史記』の故事と菅三品の詩を併記した。「松もむかしの友ならぬ」というのは、『百人一首』にも入る『古今集』巻第十七・雑歌上の藤原興風の歌「誰をかもしる人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」を踏まえた指摘である。この歌は『徒然草』第二十五段の文章との直接な影響関係は認められないが、植物を擬人的に取り上げ、友人に喩える発想は通じ合っている所が見られる。『盤斎抄』はまた「李ヵ詩是故ニ桃李樹、吐レ花遂ニ不レ言。山ヵ詩桃李不レ言一梅風」と、李白と黄庭堅の詩をあげた。しかし、李白の詩「古風五十九首其二十五世道」は「所以桃李樹、吐レ花竟不レ言」[7]となっており、黄庭堅の「寺齋睡起二首其二」は「桃李無レ言一再風、黄鸝惟見緑葱葱」[8]となっている。いずれも『盤斎抄』があげた詩句の表現と異なり、管見の限りでは『盤斎抄』の表現通りのものは見当たらない。しかも、この二首の詩は「桃李不言」故事を踏まえているものの、『徒然草』第二十五段の、懐旧の思いを表す用法とは明らかに異なる。そして、その後に『盤斎抄』はこの句についての解釈を続けている。李広「将軍の生まれつきものいはぬ人なれど。心中にまことの徳あれば人の信じて。あつまる事。桃李人にこびといはねとも花見事にさけば。人のあつまるにたとへて。いひたることはざより桃李ものいはずとつかひつけたり。桃李人のすまぬ家にのこりてあるを見てむかしよりあるものゝのころはこればかりなるが。これはものいはず。さていかゞせんとなげきたる心也」と述べ、「世尊寺の桃花をよめる　古郷の花のものいふよなりせはいかにむかしのことをとはまし」という『後拾遺和歌集』巻第二・春下の出羽弁の和歌を引用している。北村季吟の『徒然草文段抄』は、「旧跡にのこれる桃李ものいはねば、むかしをかたりあはせん友もなくなりてはかなき心地也。文意奇妙にや」[9]と述べ、『埜槌』があげた二つの出典を引用した。『盤斎抄』と『文段抄』は、廃れた旧邸に残される桃李はものを言わないので、昔のことを語り合う友もいないというむ

なしさ・はかなさがこの文章に含まれていることを指摘している。

黒川由純の『徒然草拾遺抄』は同じ『埜槌』の記述を引用して、また、「ミヌイニシヘノ」の注に、「人ノウヘニテイニシヘノタメシヲ見キクニモ、イケルカキリノ世ニコヽロヲトヽメテ、ツクリシメタル人ノ家居ナコリナクウチステラレテ、世ノナラヒトツネナクミユル、イト哀ニハカナサシラルヽヲ」と『源氏物語』の匂宮の巻の文章をあげた。これは源氏が亡くなり、六條院は人が少なくなって寂しくなった時に夕霧の歎きのことばであり、主人が亡くなる後に廃れた邸宅に世の常なさを見る発想は第二十五段とよく通じ合っていると言える部分である。

近代以降の注釈書が指摘した出典は大体これら近世諸注があげたものによっているが、田辺爵氏は新たに「この部分は、平家物語を出典と考えるべきである」と指摘している。[10] つまり、覚一本系『平家物語』巻三「少将都還」の部分では以下の通り、前述した文時の漢詩と出羽弁の和歌を並べてあげている。

三月中の六日なれば、花は未だ名残あり。楊梅、桃李の梢こそ、折知り顔に色々なれ。昔の主はなけれども、春を忘れぬ花なれや。

少将花のもとに立寄ッて、

桃李不言、春幾暮。煙霞無跡、昔誰栖。

ふるさとの花の物いふ世なりせばいかにむかしのことを問はまし。

この古き詩歌を口ずさみ給へば、康頼入道も、をりふしあはれにおぼえて、墨染の袖をぞぬらしける。[11]

丹波成経が鬼界島から帰り、亡くなった父成親の邸宅の荒れ果てた様子を見て悲しんでいる部分である。確かに、『平家物語』の該当部分では、文時の句と出羽弁の和歌を並べ、「桃李不言」の表現を懐旧の意味で使う意匠と、桃の花とともに昔のことを語る意匠をともに述べて統合している。その意味で、ものを言わない桃李と昔のことを語る

という両方の要素が見られる『徒然草』第二十五段は、『和漢朗詠集』と『後拾遺和歌集』を直接の出典として考えることができる点で、旧邸懐旧の情景を描いた『平家物語』のこの部分の影響も否定できないだろう。しかも、周知の通り、『徒然草』には『平家物語』の作者信濃前司行長について言及する章段[12]が見られることからも、なおさらである。『平家物語』の成立は長期にわたって複雑な過程を経て形成されたものであり、この行長説についても多くの問題が残っているが、その書かれた年代の古さと話の詳しさで『徒然草』は『平家物語』研究でもとくに重要視されてきた資料である[13]。兼好は『平家物語』の詞章・本文の全体を読み得て、その全体を総合的に把握していたと安良岡氏が推測したこともあったように[14]、『徒然草』における『平家物語』の影響は看過できない。ただし、この「桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん」の文章に影響を与えた先行作品としてもうひとつ想定したいのは『和漢朗詠集永済注』である。少し長くなるが、この文時の詩についての注の該当部分をあげておきたいと思う。

桃李不言春幾暮　煙霞無跡昔誰棲

（中略）大和国ノ竜門寺ハ、昔、仙人ノスミカ也。弁ノ乳母云女房、彼寺ニマイリタリケルニ、モヽノ花ノ、サキタリケルヲミテ、フルサトノ花ノモノイフヨナリセハイカニムカシノコトヲトハマシ、トヨミケルモ、此心也[15]。

『永済注』では、この歌は「弁ノ乳母云女房」の歌としてあげられており、詠歌の場所ももと貞純親王の桃園第として知られ、桃に縁の深い[16]世尊寺ではなく、竜門寺になっているが、竜門寺で桃の花を詠んだ弁の乳母の歌として、同じ『後拾遺集』の雑の部に見られる。

やよひの月りう門にまゐりてたきのもとにてかのくにのかみ義忠がもものはなのはべりけるをいかがみるといひ侍りければよめる　弁のめのと

物いはばとふべきものをもものはないくよかへたるたきのしらいと

おそらく『永済注』は何かの間違いでこのように記したのではないかと思うが、或いは、この仙家の漢詩を考える時に、『懐風藻』以来仙境に捉えられ[17]、『徒然草』第八段にも「久米の仙人の、物洗ふ女の脛の白きを見て、通を失」ふと名前が見られる久米仙人の住処として知られている竜門寺[18]のイメージが働いたのであろうか。ちなみに、漢詩注に『永済注』を引く北村季吟の『和漢朗詠集註』[19]においても、この箇所を直さずにそのまま記している。いずれにせよ、文時の漢詩の注として出羽弁の和歌があげられていることが確認できる。

また、この文時の漢詩についての各系統の古注を表にまとめてみると、以下のようになる。[20]

	江注	私注	註抄	見聞系	書陵部本系	永済注	和談鈔
淳茂願文の事	○	○	○			○	
李広伝の故事		○	○			○	○
仙家桃花の事				○	○（『幽明録』等に見られる阮肇の故事を引く）	○	○
『後拾遺集』「ふるさとの」歌の事						○	

表を見るとわかるように、文時の漢詩の注として、李広伝の「桃李不言、下自成蹊」という故事を引いた注釈は『私

注』、『註抄』、『永済注』と『和談鈔』であるが、『後拾遺集』の出羽弁の歌について言及したのは『永済注』だけである。『朗詠江注』は、「桃李不言」と「煙霞無跡」の対句は淳茂の願文に見られるもので、「如此事不避歟」[21]と述べられており、この指摘は『私注』、『註抄』、『永済注』にも受け継がれている。ただし、ここに指摘された淳茂の願文は今未詳とされている。[22]猶、近似する対句表現は『菅家文草』巻五の「三月三日同賦二花時天似一レ醉」にも「煙霞遠近応二同戸一、桃李浅深似二勧盃一」[23]と見られ、文時の漢詩は道真の詩の影響も受けていると考えられる。そのほか、桃花を仙人と関係の深い花として取り上げた注釈は見聞系、書陵部本系、『永済注』と『和談鈔』である。その中に、『書陵部本朗詠抄』は「仙ニ、必ス桃花アリ。阮肇等カ仙家ニ入テ、桃花ヲ見ルカ如シ」と述べ、『幽明録』に見られる阮肇の名前をあげている。[24]阮肇は友人の劉晨と一緒に山に入ったが、道に迷って食料もなくなり、飢え死になりそうなところに、桃の樹を発見し、その実を食べて体力を取り戻した。その後、二人は仙女と思われる女性と出会い、山の中に半年間一緒に過ごしたが、桃の実はまたその仙女の食べ物として宴会の場に登場する。この話では、桃李の花ではなく、桃の実が仙界の食べ物として描かれているが、このように、桃は漢籍において、仙人と関係の深い植物であることが確認できる。『和漢朗詠集』仙家の部のこの漢詩は、桃李をもって仙人の住む旧家の風景を描写するのは、こういう漢籍の故事が背景にあることが考えられる。

ここまで見てきたように、懐旧の意味で「桃李不言」という表現を使った『和漢朗詠集』文時の漢詩と、桃の花と一緒に昔を語ることを詠んだ『後拾遺集』出羽弁の和歌と両方が見られるものとして、『和漢朗詠集永済注』と『平家物語』があげられる。田辺氏は『平家物語』を『徒然草』第二十五段のこの部分の直接の出典としたが、[25]『永済注』のこの記述も看過できないと思う。『永済注』の成立は平安末期から鎌倉中後期の間に遡ることができ、『平家物語』の伝本の一つの『源平盛衰記』には『永済注』の影響が少なからず見られることは黒田彰氏の研究によって明らかに

されたことである。[26]『平家物語』は『永済注』の影響を受け、更に『徒然草』に影響を与えたことも想定できるが、或いは『徒然草』は直接に『和漢朗詠集』及びその古注の『永済注』によったことも考えられないわけではない。このように、典拠あるいは表現の基層はさまざまに求めることができることが判明してきており、今はどちらかに限定する決め手はないが、このように漢詩文と和歌をつなぐ朗詠古注や『平家物語』の世界が『徒然草』に投影していることは、『徒然草』の表現形成を考える上で重要なことである。

二、漢詩に詠まれる「桃李不言」

前述したように、この第二十五段の「桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん」という表現は、廃れた邸宅に昔の樹木だけが残っている情景を見て、懐旧の思いを述べたものである。しかし、この有名な文句は漢籍において、もともと全く違う意味で用いられたものである。そこで、「桃李不言」という表現の意味と用法の変遷について考察することにしたい。

「桃李不言」というのは、『史記』、『漢書』に出てくる李広将軍に関する故事で、『蒙求』にも取り入れられて、人口に膾炙するものである。

余睹李将軍悛悛如二鄙人一、口不レ能レ道レ辞。及二死之日一、天下知與レ不レ知、皆為尽レ哀。彼其忠実心誠信二於士大夫一也。諺曰、桃李不レ言、下自成レ蹊。此言雖レ小、可二以諭一レ大也。(『史記』巻百九「李将軍列伝」[27])

賛曰、李将軍恂恂如二鄙人一、口不レ能レ出レ辞。及二死之日一、天下知與レ不レ知皆為流レ涕。彼其中心誠信二於士大夫一也。諺曰、桃李不レ言、下自成レ蹊。此言雖レ小、可二以喩一レ大。(『漢書』巻五十四「李広蘇建伝」[28])

賛曰、李将軍恂々如二鄙人一、口不レ能レ道レ辞。及二死之日一、天下知与レ不レ知、皆盡レ書為レ哀。彼其忠実心、誠成レ信二於士大夫一也。諺曰、桃李不レ言、下自成レ蹊。此言雖レ小、可二以喩一レ大。（『蒙求』「陳平多轍・李広成蹊」）[29]

桃李はものを言わないが、美しい花と美味しい実があるために、その木の下には自然に人が集まってきて小道ができるという、無口だが、人徳があるために、人々に敬愛されている李広将軍を讃えるこの故事の意味は、『徒然草』第二十五段の「桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん」という文章の意味とも、『徒然草』に影響を与えたと思われる『平家物語』や『和漢朗詠集』の漢詩の意味とも明らかに相違している。よって、この表現が李広伝の故事「桃李不言」の意味と用法から離れて、懐旧を表すものとして使われるようになった経緯を、中国と日本の漢詩の用例をあげながら考えたい。

中国の漢詩において、時代がはやい用例として『文選』に見られる阮籍の「詠懐詩」があげられる。

嘉樹下成レ蹊、東園桃與レ李。秋風吹二飛蓬一、零落従レ此始。繁華有二憔悴一、堂上生二荊杞一。駆レ馬捨レ之去、去上二西山趾一。一身不二自保一、何況恋二妻子一。凝レ霜被二野草一、歳暮亦云已。（『文選』巻第二十三　阮籍「詠懐詩十七首之三」）[30]

『文選』李善注では第一句について、『漢書』の李広伝に見られる「桃李不言、下自成蹊」を引いて説明している。この詩句は李広伝の故事を踏まえているが、違う用法として「桃李成蹊」の故事を使っている。東園に嘉樹の桃と李があるゆえに、自然に小道ができ、にぎやかだったが、秋風が吹いて花が散ってしまうと、誰も来なくなって、華やかなところもすっかり廃れてしまう。ここでは、懐旧の思いまでにはなっていないが、一種の無常を表す景物として桃李が使われている。

『文選』には「桃李不言、下自成蹊」の故事を詠み込んだ詩はもう一首見られ、謝眺の「和二徐都曹一」である。詩

人が早朝に友人と郊遊に出かけ、その途中の春景を描いた詩である。阮籍の詩に比べればかなり明るいイメージを帯びている。

宛洛佳二遨遊一、春色満二皇州一。結レ軫青郊路、迴瞰蒼江流。日華川上動、風光草際浮。桃李成二蹊径一、桑榆陰二道周一。東都已俶載、言帰望二緑畴一。(『文選』巻第三十　謝眺「和二徐都曹一」)

ここでは阮籍の詩と同じく「桃李不言、下自成蹊」の故事を踏まえたが、春景の美しさを表す表現として取り入れたものである。

このように、『文選』の中に「桃李不言、下自成蹊」の故事を用いた詩は二例が見られ、そのいずれも桃李そのものを詠んだ表現であり、人に喩える含意を持つ李広伝においての意味とは異なる。この故事は桃李を取り上げるものであるために、自然に桃李、或いは春の美しさを表すものとして使われることが想定できる。これはつまり謝眺の詩に見られる用法である。そこから一歩想像を走らせ、このような美しい桃李の花でも凋落する時が来るということから、この故事を阮籍の詩のように詠懐の意味として使われる用例も表れたのであろう。ちなみに、唐代司馬貞の『史記索隠』に「姚氏云、桃李本不レ能レ言、但以二華実一感レ物、故人不レ期而往、其下自成二蹊徑一也。以喩下廣雖二不レ能レ出レ辞一、能有レ所レ感、而忠心信レ物故上也」と、桃李はものを言わないが、花と実があるので、人々はそこに行き、その樹の下は自ずから小道ができることを以って、李広将軍は吶弁であるが、その忠心と物を信じる心があるので、人々に慕われることを喩える、という注をつけている。また、唐代顔師古の『漢書注』に「言桃李以二其華実一之故、非レ有レ所二召呼一、而人争帰趣、来往不レ絶、其下自然成レ徑、以喩下人懐二誠信之心一、故能潜有レ所レ感上也」と指摘があり、つまり、桃李はその花と実のために、呼ばれてもいないのに、人々は集まってきて、その樹の下に自然に小道ができることを以って、李広将軍は誠信の心を持っているので、無口であっても人々を感動させた、という注である。これ

らの注からもわかるように、李広伝では桃李の花と実と両方取り上げているが、阮籍の詩は散る花から繁華のはかなさを連想するもので、明らかに花のほうに重点を傾けている。ただし、謝眺の詩になると、花か実かどちらかははっきりしないが、明るい春の景色を取り上げる詩句なので、むしろ花だけではなく、実を結ぶ桃李の美しさも含めて詠んだのであろう。

そして、唐詩になると、この故事を用いた例がさらに多くなり、意味も多様になってきた。もともとの李広伝での意味として使われた例もいくつか見られるが、この表現を借りて、春の景色を描いたり、ことばを発する意味を表したりする例も確認できる。その中に一番注意を引かれるのは、懐旧の表現として使われた用例も見られることである。

金谷千年後、春花発満レ園。紅芳徒笑レ日、穠艶尚迎レ軒。雨湿軽光軟、風揺砕影翻。猶疑施二錦帳一、堪歎罷二朱紈一。愁態鶯吟渋、啼容露綴繁。慇勤問二前事一、桃李竟無レ言。（『全唐詩』巻四八八　侯冽「金谷園花発懐古」）[31]

寂寥金谷澗、花発旧時園。人事空懐古、煙霞此獨存。管弦非二上客一、歌舞少二王孫一。繁蕊風驚散、軽紅鳥乍翻。山川終不レ改、桃李自無レ言。今日経二塵路一、凄涼詎可レ論。（『全唐詩』巻四八八　王質「金谷園花発懐古」）

今日春風至、花開二石氏園一。未レ全二紅艶一折、半與二素光一翻。点綴疎林遍、微明古径繁。窺臨鶯欲レ語、寂寞李無レ言。谷変迷二鋪錦一、台余認二樹萱一。川流人事共、千載竟誰論。（『全唐詩』巻七八二　張公乂「金谷園花発懐古」）

この三首とも「金谷園花発懐古」と題した詩である。そのほかに、「金谷園花発懐古」を題目とした唐詩はもう一首あり、その中に「桃李不言」は見られないが、やはり「桃李」が用いられている。

春風生二梓澤一、遅景映二花林一。欲レ問二当時事一、因傷二此日心一。繁華人已歿、桃李意何深。澗咽歌声在、雲帰蓋影沈。地形同二万古一、笑価失二千金一。遺跡応レ無レ限、芳菲不レ可レ尋。（『全唐詩』巻七八七　無名氏「金谷園花発懐古」）

金谷園は西晋の大富豪石崇の別荘である。当時は奢侈を極めた邸宅であったが、石崇が孫秀の讒言によって処刑された後は荒れ果てた所になり、懐古の詩によく詠まれる場所である。この四首の唐詩はまさに題目のとおり、花が咲く金谷園を見て懐古の思いを詠んだものである。それから、傍線で示したように、四首ともすっかりさびれた今日の金谷園の春景を描くときに、「桃李無言」あるいは「桃李」の表現を用いている。ただし、金谷園に桃李のイメージを重ねる詩文は早い時代には見られない。石崇自身は、「思帰引序」と「金谷園詩序」という金谷園を描いた詩文を残しているが、その中に桃李の樹についての言及はない。「思帰引序」は『文選』巻第四十五に見られ、「其制宅也、却阻二長堤一、前臨二清渠一、百木幾二於萬株一、流水周二於舎下一」として金谷園の風景を描いている。その萬株の木には桃李の樹が入っているかもしれないが、今になっては知る由もない。「金谷詩序」には「有二別廬一在二河南県界金谷澗中一、或高或下、有二清泉茂林、衆果竹柏、薬草之属一」[32]として金谷園の景色を描いているが、やはり桃李についての言及は見られない。また、石崇の友人で、西晋時代の有名な文人の潘岳にも「金谷集作詩」という漢詩を残している。詩の中には、「前庭樹二沙棠一、后園植二烏椑一。霊囿繁二石榴一、茂林列二芳梨一」[33]として金谷園の中の樹木について述べているが、桃李の樹についての描写は見られない。当時、石崇と潘岳を含めて、「二十四友」という文学グループがあり、よく石崇の金谷園に宴遊し、詩文を作っていたが、元康六年（二九六年）に石崇が友人王詡の餞別のために、金谷園に宴会を開き、その時に作られた詩文を収録したものが『金谷集』という詩集であるが、残念なことに、すでに散逸して、潘岳のこの「金谷集作詩」一首しか残っていない。それで、今の我々はこれらの詩文から当時の金谷園の繁華を想像するしかないが、すでに述べたように、その記述の中には桃李についての描写は確認できない。ただし、潘岳は河陽県令を務めた時に、全県で桃の樹を植えるように命じたことがかなり有名な話であり、桃の花を連想しやすい人物である。時代が下るが、南北朝の詩人の庾信は「枯樹賦」という作品に、「建章三月火、黄河万里槎。若非二

金谷満園樹一、即是河陽一県花」[34]という文章を書いた。建章宮を焼き尽くした火は三ヶ月も燃え続いており、その灰燼は筏のように黄河に沿って万里まで流されていく。それらの灰燼は、もし金谷園の樹ではなければ、即ち河陽県の桃の花である。ここでは、金谷園と桃の花を重ねた形で取り上げられている。この文章は白居易の『白氏六帖』にも取り入れられ、菅原為長の『文鳳抄』にも見られる[35]著名なものであり、潘岳と桃、河陽と桃、さらに金谷園と桃李の組み合わせは後の漢詩文にも詠まれるようになった。

さらに、唐詩になると、金谷園と桃李を一緒に詠んだ詩例のはやいものに劉禹錫の「楊柳枝詞」があげられる。

金谷園中鶯乱飛、銅駝陌上好風吹。城中桃李須臾尽、争似二垂楊一無レ限レ時。(『全唐詩』巻三六五　劉禹錫「楊柳枝詞九首之四」)

ただし、ここの桃李は金谷園の中の樹木ではなく、洛陽城の中の景物として詠まれている。金谷園の中に鶯が乱れて飛び合い、銅駝大通りの上に心地よい風が吹いている時代はすでに過ぎ去った。城中の美しい桃李の花は少しの間に散ってしまって、どうして生い茂る楊柳に比べることができるのであろうか。なお、ここの桃李の花はやはり懐古の思いを託した景物として取り上げられた。

そして、金谷園懐古のテーマで有名な詩作を残した杜牧の詩にはじめて金谷園の桃李が詠み込まれた。

淒涼遺跡洛川東、浮世榮枯萬古同。桃李香消金谷在、綺羅魂断玉楼空。往年人事傷心外、今日風光屬二夢中一。徒想夜泉流客恨、夜泉流恨恨無レ窮。(『全唐詩』巻五二六　杜牧「金谷懐古」)

当時の桃李の香はすでに消えてしまったが、金谷園の遺跡はまだ残っている。綺羅の衣を着た美人は魂を断ったので、玉楼にはもう誰もいない。ここでは石崇が寵愛した緑珠という妾の話を踏まえている。緑珠の話は『晋書・石崇伝』に見られる[36]。石崇の後ろ盾の賈謐が失脚して誅殺された後、政敵の孫秀は石崇に美麗と多才で名高い美人の緑珠

を求めたが、断られたため、石崇を恨んで反逆の罪を石崇に被せ、兵を率いて石崇一族を誅殺した。孫秀の軍隊を見る石崇は緑珠に「私はあなたの為に罪を得たなあ」と語り、緑珠は「御前で死なせていただきます」と言い、楼閣から身を投げた。この詩では、桃李の花は消え去ったものとして取り入れられ、金谷園が繁栄を極めている時代を象徴したものである。このように、杜牧は桃李の花を金谷園懐旧の景物として詩に取り入れたのである。

そして、ほかの用法で使われた「桃李不言」故事の用例にも少し触れたいと思う。たとえば、この表現本来の意味として使われた用例をいくつかをあげておく。

数奇何以託、桃李自無レ言。（駱賓王「早秋出塞寄二東台詳正学士一」）[37]

詩人は、苦難に満ちた運命を何に託していいかを歎き、李広将軍のように、無言でも人徳があればいつか人に受け入れられるようになると、自分を慰めている。

爾去且勿レ誼、桃李竟何言。（李白「送二薛九被レ讒去レ魯一」）

あなたが去るとき、多言は無用です。桃李は何も言わなくても人々はその徳をわかってくれるからと、友人に説くこの詩句も李広伝の故事の原意を用いて、慰めの意味を含めて使われている。

嶷嶷瑚璉器、陰陰桃李蹊。（杜甫「水宿遣レ興奉レ呈二群公一」）[38]

ここでは「桃李蹊」とともに、「瑚璉器」という『論語』の典故を用いて、「群公」の人徳を讃えている。[39]

自是桃李樹、何患不レ成レ蹊。（李賀「奉レ和下二兄罷レ使遣レ馬帰二延州一上」）[40]

これも、桃李の木が美しい花と実があるように人徳があれば、人が集まってこないことを心配する必要はないと、一種の慰めを込めて兄弟に語りかけている。

さらに、李広伝の故事から離れて、この表現を使って、桃の花の美しさを詠んだ詩例も少なからず見られる。たと

えば、

何須命二軽蓋一、桃李自成レ陰。（『全唐詩』巻三四　楊師道「春朝閑歩」）

これは、春の朝の散歩で目に入った美しい景色を詠んだ詩句である。軽蓋、つまり軽車に、その花が咲いている小道に行くように命じるまでもなく、桃李の美しさのために人がいっぱい集まってきて、自然に道ができるぐらいだ、という春景の美しさを描いた。

歳去無レ言忽憔悴、時来含レ笑吐二氛氲一。（李嶠「侍二宴二桃花園一詠二桃花一応制」[41]）

時期が去ると、忽ちに凋落し、時期が来ると、笑顔を綻びて香りを吐き出すこの美しい桃の花よと、桃の花を讃するこの詩句も、「無言」という表現を詠みこむことで桃花を暗示している。

応レ候非レ争レ艶、成レ蹊不レ在レ言。（李商隠「賦得二桃李無言一」[42]）

季節に応じて咲くから、艶を争うのではない。道ができるのはことばを話せるためではない。この詩も「桃李不言、下自成蹊」の故事を使って春の桃李の妖艶さを讃えていた。

そして、春の景色に限らなくても、「無言」なる「桃李」という表現が李広伝の故事の本意から離れて定型化し、ものを言わないことが桃李の性格のひとつになっていく傾向も見られる。たとえば、

玉不二自言一如二桃李一、魚目笑レ之卞和恥。（李白「鞠歌行」）

玉は桃李のように自分からことばを話すことができないから、卞和は自分が持っている宝の玉を魚の目のように価値のないものに間違えられて恥をかくようなことがあるのだ。ここでは主に卞和の玉のことを話題にしているが[43]、ものを言わないことを表すために「桃李不言」の故事を詠みこんだ。

朝々暮々主人耳、桃李無レ言管弦咽。（元稹「有レ鳥二十章」[44]）

この句も鳥がいつも囀っていることを述べるために、「桃李不言」の故事を巧みに詠み込んだ。

桃李無レ言難二自訴一、黄鶯解レ語憑レ君説。（白居易「和二雨中花一」）[45]

桃李は口がきけないので、自分で訴えることは難しいが、黄鶯は鳴き声を発するので、君に説得を頼もう。この句は「桃李不言」の表現をもじってことばを発することを話題にしている。

これらの用例を見ればわかるように、「桃李不言」は唐詩においてすでに本意から離れて、その表現だけを取り入れる、いわば一種の修辞法的な用法が成り立つようになっていた。それに、旧邸懐旧というテーマの詩の中に「桃李不言」の故事が使われていることが確認できる。また、李広伝の原典は、花と実両方を取り上げているが、懐旧の意味で使われた用例を見ると、桃李の花だけが描写の対象になっている。原典で取り上げた実の魅力に対して、散る花がもたらした無常の感覚が働いたためであろう。ただし、故事のもとの意味を踏まえて詠んだ「桃李」、春景の美しさを描くために取り入れた「桃李」と、詩句に修辞的に用いられた「無言」なる「桃李」は必ずしも花に限定していない。

唐詩の後、宋詩になっても、大体これらの用法を受け継いでいる。李広伝本来の意味で詠んだもの、李広伝の故事の本意から離れて、春景と桃李の美しさを詠んだもの、さらに、桃李の性格のひとつとしてものを言わないことを詠んだものの例がそれぞれ見られる。たとえば、前述した『盤斎抄』があげた黄庭堅の詩句「桃李無レ言一再風、黄鸝惟見緑葱葱」について、任淵は「桃李一再経レ風、無レ復二顔色一、紅紫事退、遽成二緑陰一」と注を付けている。つまり、この句は「桃李無言」の表現を借りて、桃李の花のことを言っている。李広伝の本意と全く異なる修辞的な用法である。また、宋詩の中にも、懐旧の詩にこの典故を用いたものがある。晁公溯の「他郷」と釈行海の「寄二一貫通一」である。「故国山川安在哉、他郷今復見二春来一。蓬蒿并興草益茂、桃李不レ言花自開」[46]という晁詩は、題目の通り、異郷

にいる詩人が故郷を懐かしむものである。ここでは、桃李はものを言わないが、自ずから花を咲いていると、「他郷の春の景物として桃李を描いた。釈行海の詩もまた、「身在異郷春又老、夢回二弧館一雨生レ寒。江山有レ待人皆往、桃李無レ言客自看」というように、故郷を思うものである。ここの桃李もまた、異郷の春の景物として詠まれた。この二首の詩の、「桃李不言」の表現を用いて、故郷を思う心情を詠む用法が、唐詩までの懐古の思いを詠む用法を受け継いだものだと思われるが、直接に懐古の思いを詠む詩ではない。

しかし、はやく『和漢朗詠集』文時の漢詩がこの典故の懐旧・懐古の思いを表す用法を取り入れており、さらに、『平家物語』や『徒然草』の表現もその傾向の影響下にある。

このような傾向はほかの日本漢詩の中にはどのように受容されているかを用例にそって確認してみたいと思う。

一番用例の多い使い方はやはり李広伝の故事の本意とは異なり、その表現を使って春の景色を描いたものである。たとえば、

宇宙荒茫。煙霞蕩而満レ目。園池照灼。桃李笑而成レ蹊。(『懐風藻』藤原萬里「暮春於二弟園池一置レ酒。一首。并序。」[47])

これは暮春の庭園の、桃李の花が池を囲んで美しく咲いている風景を描くために「桃李成レ蹊」の表現を使っている。

洛陽城東桃與レ李。一紅一白蹊自成。(『文華秀麗集』朝野鹿取「奉和春閨怨。一首。」)

これも桃李の花の艶かしさを表すために「桃李成蹊」の表現を詠みこんだ。そのほかに、このような傾向で「桃李不言」の表現を取り入れた用例は以下のように少なからず見られる。

夜雨偸湿、曾波之眼新嬌。暁風緩吹、不言之口先咲。(『本朝文粋』巻第十　紀長谷雄「仲春奠聴レ講二礼記一同賦二

桃始華[48])

桃李不レ言多歳意、水泉猶破一宵夢。(『粟田左府尚歯会詩』坂合部以方「暮春見藤亜相山荘尚歯会詩」[49])

桑榆景暮猶応レ惜、桃李春深豈不レ言。(『粟田左府尚歯会詩』藤原忠輔「暮春見藤亜相山荘尚歯会詩」)

欲レ問二桃蹊一嬌不レ答、更求二梅榛一混難レ尋。(『類聚句題抄』大江朝綱「香不レ知二花蕊一」[50])

桃艶不レ言心更懶、梅唇先咲感偏頻。(『類聚句題抄』三善文江「花間訪二春色一」)

これらの詩例は「桃李不言」の表現を用いて、美しい春の景色を描いている。その中、「暮春見藤亜相山荘尚歯会詩」を詩題とした二首の漢詩が取り上げた桃李は花か実かどちらかを特定することは難しい以外、ほかの詩例は全部桃李の花を詠んでいる。

また、この故事の本来の意味を用いた例は左のように、いくつか見られる。

願以成レ蹊枝葉下。終天長樹玉階邊。(『凌雲集』太上天皇御製「詠二桃花一。一首。」[51])

この詩句は、どうか桃の木の枝葉の下に自ずから小道ができるほど人々が行き通い、いつまでも宮中の玉階のの辺りに植えておきたいものだと、李広伝の故事を踏まえて桃を詠んだものである。

閉レ径無レ帰維隠士、成レ蹊有レ託彼将軍。(『経国集』巻十一　賀陽豊年「七言賦レ桃応令一首」[52])

この句は、道を閉じて帰ることもないこの桃花源の隠士、自ずから人が集まってきて小道ができるということを桃李に託したあの李将軍というように、桃に関する二つの故事を並べて文章を綴っている。

欲二知二此樹成蹊徳一、真麗芬芳自可レ憐。(『経国集』巻十一　林娑婆「七言賦レ桃応令一首」)

この詩は、桃李の成蹊の徳を知ろうと思うなら、その香りが自然に人に愛されることによって知られるという意味で、桃の樹の下に自ずから人が集まって小道ができるということを桃の徳として詠んでいる。

桃李不レ言今在レ此、霜台早晩遇二芳栄一。（『江吏部集』大江匡衡「七言三月三日夜於二員外藤納言文亭一守二庚申一同賦二桃浦落レ船花一。」）[53]

この句は、今ここに咲いている桃李は何も言わなくても、美しい花と美味しい実があるために、自然に人々が集まってくる。そのようにわたくしもいつかは栄達の日が来るでしょう。[54]

この四首とも李広伝の故事の本来の意味を詠みこんでいる。さらに、もう一首この意味を逆用した詩例が見られる。

桃蹊長掩レ迹。蒿里忽迎レ轜。（『文華秀麗集』菅原清公「奉和侍中翁主挽歌詞。」）

見物の人でいっぱいになっているはずの桃の咲く小道は永遠に人の足跡を覆い隠し、死の里から思いもかけずに霊車を迎える。ここは人が自然に集まってくるという「桃李成蹊」の本来の意味を逆用して、人が亡くなることを述べている。

そして最後に、日本漢詩の中にも一例だけであるが、金谷園と桃李両方を詠みこんだ例が見られることに注目したい。

春女春粧言不レ及。無量無数満二華庭一。心嬌膽小羞二踊歩一。声裏微々寿千齢。洛津廻雪當レ韜レ影。巫嶺朝雲応レ歛レ行。河陽旧縣先亡レ色。金谷新園無二復栄一。泣眼看々不二曾厭一。徒然奪レ魂亦損レ明。還知人間仙路近。重見桃李目前生。（『凌雲集』小野岑守「奉レ和下観二佳人蹋歌一御製上。」）

ここでは「桃李不言」の故事を使っていないが、潘岳が河陽令になった時に全県に桃花を植えるように命じた故事と、金谷園の繁栄と奢侈の故事を踏まえて対句を作ったことは前に述べていた漢詩文の影響下にあることが認められる。結句の「重見桃李目前生」は、陶淵明『桃花源記』の仙境を思い出させる表現[55]でありながら、前の部分の河陽県と金谷園の桃李のイメージを重ねて詠んだものであろう。

次に注目したいのは、藤原定家に仮託された歌論書『三五記』に見られる「故園桃李看無レ益、情在二旧遊一不レ在レ花」[56]という漢詩である。この句は「物哀体」に配列しているが、その出典は不明とされている[57]。しかし、定家の日記『明月記』嘉禄元年（一二二五年）二月二十九日条に「桃李浅深又満レ望。過二白河辺一、只有二懐旧之思一。昔与二旧遊一翫レ花之所、時移事去、花猶毎レ春不レ回、古木折尽、堂宇滅亡」[58]という記述があり、荒れ果てる故園にある桃李を見て、昔の友人を偲ぶという懐旧の感慨は両者で共通しているだけではなく、「故園桃李」「旧遊」「花」という表現まで両者で一致している。『三五記』が偽書であるため、『明月記』の記事を踏まえて、この漢詩が作られたと考えたほうが妥当であろうが、傍線で示した『明月記』のこの記事の表現は『徒然草』第二十五段にも見られる要素で、『明月記』のこの部分と『徒然草』第二十五段の発想との近似性には看過できないものがある。定家が見ている「白河辺」は、昔の繁栄を失って、焼亡して荒れ果てる地となった法勝寺の辺りであるが、この情景は場所こそ違うものの、『徒然草』第二十五段で描かれたすっかり廃れてしまった京極殿・法成寺の風景とよく類似していることがわかる。兼好はここで桃李の花を連想したのは、この『明月記』の記事の影響があったことも考えられよう。

三、和歌に詠まれる「桃李不言」

永済注が文時の漢詩に注を付けた時にあげた出羽弁の和歌のように、「桃李不言」という漢籍に見られる故事は、漢詩だけではなく、和歌にも取り入れられた。そこで、最後に、和歌に詠まれた桃李と「桃李不言」の故事の使い方について分析を試みることとしたい。

直接「桃李不言」の故事を詠みこんだものは、前述した『後拾遺和歌集』の出羽弁と弁のめのとの歌が一番早い例

である。

世尊寺のもものはなをよみはべりける　　出羽弁

130 ふるさとのはなのものいふよなりせばいかにむかしのことをとはまし

やよひの月りう門にまゐりてたきのもとにてかのくにのかみ義忠がもものはなのはべりけるをいかがみる

といひ侍りければよめる　　弁のめのと

1056 ものいはばとふべきものをもものはないくよかへたるたきのしらいと

出羽弁の歌は、この桃と由緒ある地である世尊寺の桃の花はもし口がきけるなら、昔のことをどう問うのだろうと詠んだもので、確かに『平家物語』と『徒然草』の該当部分の旧邸懐旧の主題と一致している。弁のめのとの歌は邸宅と関わらないものの、桃の花はもし口がきけるなら、どれほどの月日を送ったのかと、滝に問うに違いないのにと、桃の花に昔を問うイメージを重ねた。この二首からもわかるように、平安時代中期に、「桃李不言」の表現と故事はすでに和歌に取り入れられたものである。

その後、「桃李不言」故事を詠んだ和歌の用例は多くはないが、いくつか見られる。

春廿首　　花園左大臣家小大進

1316 ももの花物いはずとかききしかばたれすきあふとたはれしもせじ（『久安百首』）

この歌は、桃の花はものを言わないと聞いたので、たれかれがその実が酸い、その花を浮かべた酒を飲みあい、恋し合っても、桃の花自身はみだらに戯れたりはしないと詠んだもので、ものを言わないということが桃花の性質のひとつとして詠まれている。

もも　　信実

2414 山吹の色にはあらねどももの花またものいはぬふるさとの花（『新撰和歌六帖』）

この歌は、くちなしの色と似ている山吹の色ではないが、桃の花も同じくものを言わない、このふるさとの花と、梔子の色に似ている山吹の色を「くちなし」に掛けて、ものを言わない桃の花を詠んでいる。

からもも　光俊

2425 ことはよもききしらじとやからももの物をばいはではなにのみさく（『新撰和歌六帖』）

この歌は、まさか聞き知らないというのか、からももは口がきけずにただ花だけを咲くと、桃花のものを言わない性質を巧みに詠み込んだものである。

この三首の歌は『後拾遺集』の弁のめのとの歌と同じように、邸宅とは関係のないものの、ものを言わない花として桃の花を詠みこんだ。このように、和歌においても、『史記』・『漢書』などの漢籍において、無口の李広将軍を桃李に喩えたように、ものを言わないことが桃の花の性質の一つとして定型化していることが認められる。

時代がさらに下り、『徒然草』の後の時代になるが、左のように、「桃李不言」を詞書きとした歌も見られるようになった。

桃花不言

161 咲く桃の花ものいはば問ひてまし入りけむ山のおくはいかにと（『師兼千首』）

また、直接に「桃李不言」の影響は見られないが、桃の花を題として、懐旧の思いを込めた詠歌も以下のように、二首見られる。

ふるさとのもものはな

14 いろはみなむかしながらももものはなふるえやわれをおもひいづらん（『寂蓮結題百首』）

故郷桃花

815 ふる里はかきねのももの花のみやむかしの春を忘れざるらむ（『拾玉集』）

この二首とも故郷の桃の花を題とした歌である。前述した『後拾遺集』の出羽弁の歌にはすでに故郷の桃の花を取り上げたように、この二首もその影響下にあるものと考えられる。特に、故郷の垣根の桃の花だけが昔の春を忘れずにいるのだろうと歌った『拾玉集』の歌は、前述した『平家物語』「少将都還」の該当部分「三月中の六日なれば、花は未だ名残あり。楊梅、桃李の梢こそ、折知り顔に色々なれ。昔の主はなけれども、春を忘れぬ花なれや」との近似性は看過できない。『平家物語』のこの部分は、「こちふかばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春をわするな」という菅原道真の歌を踏まえていることが諸注釈によって指摘されてきたことである。道真の歌では、春を忘れないのが梅であるが、慈円の歌になると、桃の花は昔の春を偲ばせる景物として詠まれている。『拾玉集』のこの歌は、『平家物語』「少将都還」の該当部分と、さらに、廃れた邸宅に桃李の花が口をきけないので、誰と昔のことを語ろうと嘆いた『徒然草』第二十五段の文意にも通じている所が認められる。また、「桃李不言」の故事を取り入れた出羽弁の歌と太宰府に流される時に都恋いの心情を梅に因んで詠んだ道真の歌と両方を踏まえ、桃を詠んだ慈円の歌からは、無口であるが、忠実な心の持ち主であるために、人々に敬愛されている李広将軍のイメージを読み取るのも不可能ではないだろう。

これらの歌例が詠んだのは、全部桃の花である。桃の花は従来、春の景色の艶めかしさや三月三日曲水の宴を詠む時に取り上げられた景物であり、また、西王母の三千年の仙桃の話[59]から、桃は三千年の齢を祝う景物として詠まれることが多いが、その中に、『後拾遺集』の時代からは、漢籍の「桃李不言」故事からものを言わない景物としてのイメージも受け継がれて詠まれていた。兼好が『徒然草』第二十五段の「桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん」

という文章を書いた時にも、こういう桃の花のイメージを念頭に置いたのであろう。

四、まとめ

『徒然草』第二十五段は世の無常を説く章段である。どんなに華やかな所でも、何百年何千年が経ったら、荒れ果てる所となる。そのために、子孫後代のことまで心配して、心を砕くのはむなしいことだと述べたこの章段は、藤原道長の京極殿と法成寺を例としてあげている。権勢の頂点に立つ道長が作った邸宅だから、当時にはいつまでも奢侈を極める所であり続けるだろうと思われたが、兼好の時代にはすでに焼失して、廃れた所になってしまった。このような情景を目にした兼好は、「桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん」と嘆いた。

この文章は『史記』・『漢書』李広伝の「桃李不言、下自成蹊」という故事を踏まえているが、無口だが、人徳があるために、人々に慕われている李広将軍を讃えることばとしてのこの故事の原意とは意味も用法も異なっている。そこで、この「桃李不言」という表現は、もともとの意味から離れて、懐旧・懐古の思いを語るものに変遷していく経緯を中国と日本の古典作品に見られる用例にそって考察を行った。

『寿命院抄』から、『徒然草』の諸注釈には、この文章の出典として、『和漢朗詠集』菅原文時の漢詩「桃李不レ言春幾暮、煙霞無レ跡昔誰栖」と、『後拾遺集』出羽弁の和歌「ふるさとの花の物いふ世なりせばいかにむかしのことを問はまし」をあげている。確かに、『徒然草』のこの文章は、文時の漢詩に見られる桃李を旧邸懐旧の思いを述べる景物として詠む要素と、出羽弁の和歌に見られる桃と昔のことを語る要素を統合した形で書かれている。また、看過できないことに、朗詠古注の『永済注』はこの漢詩に注をつける時、この和歌を用いて説明している。これは『平家

物語』に受容され、「少将都還」の巻では、成経が亡父の邸宅でこの漢詩と和歌とを両方口ずさんで懐旧の思いを述べている。『平家物語』が『永済注』の影響を受け、さらに『徒然草』のこの部分に影響を与えたとも想定できるが、『永済注』が直接に『徒然草』に受容されたとも考えられる。いずれかを決める証拠はないが、『徒然草』のこの文章はこういう背景に書かれたことがわかる。

また、「桃李不言」の表現は、無口だが、人徳のある李広将軍を讃えることばとしての李広伝の原意から離れて、懐旧の思いを託した表現として詠む、という漢詩の中に見られる傾向は、かなり早い段階で日本漢詩にも見られ、文時の漢詩はこのような傾向の中にあるものである。そして、李広伝には桃李の花と実を両方取り上げているが、懐旧の思いを詠む中国の漢詩にはその花だけを詠む傾向が見られ、桃李を詠む日本漢詩においても、花だけが対象として取り入れたものが多い。さらに、和歌にも、春の美しさを表す景物としての桃李や、三千年の齢を祝う景物としての桃を詠むほかに、ものを言わないことが桃の花のひとつの性質として定型化している傾向が見られ、「桃李不言」の故事を踏まえて懐旧の思いを表す和歌も詠まれていた。

以上述べたように、『徒然草』第二十五段は、旧邸懐旧のテーマを語る時に用いた「桃李もの言はねば、誰とともにか昔を語らん」という文章の出典になる「桃李不言」という表現は、このように、原典の意味から離れて、中国と日本の漢詩文、さらに和歌においても、懐旧・懐古の思いを詠む用法が現れ、複雑な変遷の経緯を経ている。ここでは、その表現の背景を明らかにする、つまり、兼好の「見聞しうる可能性のある情報網を整理し、検討を加えておくこと」[60]を試みた。『徒然草』は文章を綴る時に用いた漢籍の故事・表現は、日本の漢詩文や和歌に取り入れ、変容し定型化しているものが多く見られる。「ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなうなぐさむわざなる。文は、文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことば、南華の篇」と第十三段にあるように、兼好は

古い書籍を心の友として親しんでいた。具体的な考察は別稿に譲るが、この中に書名があげられた『白氏文集』についても、前述したような、日本の漢詩文や和歌を媒介にした受容方法が見られる。このような間接的な受容方法は、『徒然草』の漢籍出典を考える時に、看過できないものである。

〔注〕

(1)『徒然草』本文の引用は、すべて烏丸本を底本とした三木紀人『徒然草全訳注』(講談社一九九二年)による。傍線は筆者による。

(2) 冨倉徳次郎『類纂評釈徒然草』　開文社一九五六

(3) 和歌の引用はすべて『新編国歌大観』(角川書店一九八三年)による。

(4) 渡辺実校注『枕草子』新日本古典文学大系　岩波書店一九九一年

(5)『寿命院抄』、『埃槌』と『慰草』の引用は吉澤貞人『徒然草古注釈集成』(勉誠社一九九六年)による。

(6)『長明方丈記抄・徒然草抄』加藤磐斎古注釈集成　新典社一九八五年

(7) 李白の詩の引用はすべて瞿蛻園、朱金城校注『李白集校注』(上海古籍出版社一九九八年)による。

(8) 黄庭堅の詩と詩注の引用はすべて劉尚榮校点『黄庭堅詩集注』(中華書局二〇〇三年)による。

(9)『徒然草文段抄』と『徒然草拾遺抄』は徒然草古注釈大成(日本図書センター一九七八年)による。

(10) 田辺爵『徒然草諸注集成』　右文書院一九六九年

(11) 市古貞次校注・訳『平家物語』新編日本古典文学全集　小学館一九九六年。ただし、『延慶本平家物語全注釈』(汲古書院二〇〇七年)によると、文時の漢詩は諸本で異同はないが、出羽弁の和歌は諸本では異同が見られ

る。延慶本と長門本は「人はいさ心もしらずふるさとは花ぞ昔の香ににほひける」という『古今集』春上の紀貫之の歌と下句が異なる「人ハイサ心モシラスフルサトノ花ソ昔ニカワラサリケル」という歌を載せており、屋代本・覚一本・中院本は出羽弁の歌を載せている。源平盛衰記は右の『古今集』の歌をそのまま載せているが、四部合戦本はいずれの歌も記さない。

(12)『徒然草』第二百二十六段「この行長入道、平家物語を作りて、生仏といひける盲目に教へて語らせけり。」

(13) 安良岡康作『徒然草全注釈』　角川書店一九七七年

(14) 同注（13）。

(15) 伊藤正義・黒田彰・三木雅博『和漢朗詠集古注釈集成』　大学堂書店一九八九年

(16)『拾芥抄』（大東急記念文庫善本叢刊中古中世篇第十三巻類書Ⅱ　汲古書院二〇〇五年）中・諸名所部第二十に「桃園。同世尊寺南。保光卿家行成卿傳之」とある。

(17)『懐風藻』（小島憲之校注　日本古典文学大系　岩波書店一九七一年）に「命駕遊山水。長忘冠冕情。安得王喬道。控鶴入蓬瀛。」という葛野王の五言詩「遊龍門寺」があるように、龍門寺の辺りは鶴に乗って昇天する仙人の王子喬を連想させる仙境として描かれている。

(18)『今昔物語集』（馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一校注・訳　新編日本古典文学全集　小学館一九九九年）巻第十一「久米仙人始造久米寺語第二十四」に「今昔、大和国、吉野ノ郡、竜門寺ト云寺有リ。寺ニ二ノ人籠リ居テ仙ノ法ヲ行ヒケリ。其仙人ノ名ヲバ、一人ヲアヅミト云フ、一人ヲバ久米ト云フ」とある。

(19) 北村季吟編『和漢朗詠集註』北村季吟古註釈集成　新典社一九七八年

(20) 分類と本文は注（15）の『和漢朗詠集古注釈集成』による。

(21) 同注（15）。

(22) 後藤昭雄・池上洵一・山根對助校注『江談抄・中外抄・富家語』新日本古典文学大系　岩波書店一九九七年

(23) 川口久雄校注『菅家文草・菅家後集』日本古典文学大系　岩波書店一九七一年

(24) 『幽明録』（百部叢書集成　藝文印書館一九六七年）に「漢明帝永平五年、剡県劉晨、阮肇共入二天台山一、取二谷皮一、迷不レ得レ返。経二十餘日一、糧食乏盡、飢餒殆死。遙望山上有二一桃樹一、大有二子実一。而絶巖邃澗、了無二登路一。攀レ葛乃得レ至。噉二数枚一而飢止体充。（中略）食畢行レ酒、有二群女来一、各持二三五桃子一、笑而言。賀二女婿来一」とある。

(25) 同注（10）。

(26) 黒田彰「源平盛衰記と和漢朗詠集永済注―増補説話の資料」『説話文学研究』十七　一九八二年
黒田彰「『朗詠古注』管見―永済注について」『国語と国文学』六十―十一　一九八三年

(27) 『史記』の本文と注の引用はすべて『史記』（中華書局一九六三年）による。

(28) 『漢書』の本文と注の引用はすべて『漢書』（中華書局一九六四年）による。

(29) 池田利夫『蒙求古註集成』（汲古書院一九八九年）によると、この部分については、最古注（国立故宮博物院藏上巻古鈔本・宮内庁書陵部藏上巻影鈔本）が「及二死之日一、天下知与レ不レ知、皆盡レ書為レ哀。彼其忠実心、誠成レ信二於士大夫一也」になっているところが、いわゆる準古注（應安頃刊五山版・国会図書館藏大永五年書写本・龜田鵬齋校「舊注蒙求」刊本・細合方明校「韓本蒙求」刊本・林述齋校「古本蒙求」刊本）には「及二死之日一、天下皆流レ涕」になっており、さらに、徐子光注（文禄五年刊「徐狀元補註蒙求」）には「及二死之日一、天下知与レ不レ知、皆為流レ涕。彼其中心、誠信二於士大夫一也」になっているという異同と増補が見られるが、

本論が取り上げる「桃李不レ言、下自成レ蹊」の部分について異同は見られない。また、『蒙求和歌』春部（新編国歌大観第十巻）にも「李広成蹊」の項目を立てて、同じ「桃李不レ言、下自成レ蹊」の諺を記し、「モノイハヌ花モ人メヲサソヒケリミチモサリアヘズモモノシタカゲ」という和歌を詠んでいる。

(30)『文選』の引用はすべて『文選』（上海古籍出版社二〇一〇年）による。

(31)『全唐詩』の引用はすべて陳貽焮主編『増訂注釈全唐詩』（文化芸術出版社二〇〇一年）による。

(32)『芸文類聚』（中華書局一九七三年）巻九「澗」の条に逸文が見られる。

(33)王増文校注『潘黄門集校注』　中州古籍出版社二〇〇二年

(34)倪璠注・許逸民校点『庾子山集注』　中華書局一九八〇年

(35)『白孔六帖』（『文淵閣四庫全書』電子版）巻七十七に「河陽花。潘岳為二河陽令一、満植二桃李花一。人号曰河陽一県花」とある。『文鳳抄』「花」（本間洋一『歌論歌学集成別巻二』三弥井書店二〇〇一年）に「潘令県石崇園　潘岳為二河陽令一（トキニ）樹（ウエ）二桃李一（タリ）。曰二河陽一県花一（フ）。金谷園、在レ上（リ）」とある。

(36)『晋書』（中華書局一九七四年）巻三十三に「崇謂二緑珠一曰、『我今為レ爾得レ罪。』緑珠泣曰、『当効二死於官一前。』因自投二于楼下一而死。」とある。

(37)陳熙晋箋注『駱臨海集箋注』　中華書局一九六一年

(38)仇兆鰲注『杜詩詳註』　中華書局一九七九年

(39)程樹徳撰・程俊英・蔣見元点校『論語集釈』（中華書局一九九〇年）に「子貢問曰、賜也何如。子曰、女、器也。曰、何器也。曰、瑚璉也」とあり、『集解』に「瑚璉、黍稷之器。夏曰瑚、殷曰璉、周曰簠簋、宗廟器之貴者也」とある。

(40) 王琦注『李賀詩歌集注』　上海人民出版社一九七七年
(41) 徐定祥注『李嶠詩注・蘇味道詩注』　上海古籍出版社一九九五年
(42) 劉学鍇・余恕誠著『李商隠詩歌集解』　中華書局一九八八年
(43) 卞和の玉に関する故事は『史記』等の書籍に多く見られる。たとえば、『史記・魯仲連鄒陽列伝』（中華書局一九六三年）に「昔卞和献レ宝、楚王刖レ之。『集解』応劭曰、卞和得二玉璞一、献二之武王一。武王示二玉人一、玉人曰、石也。刖二右足一。武王没、復献二文王一、玉人復曰、石也。刖二其左足一。至二成王時一、卞和抱レ璞哭二於郊一、乃使二玉尹一攻レ之、果得二宝玉一」とある。
(44) 冀勤点校『元稹集』　中華書局一九八二年
(45) 謝思煒『白居易詩集校注』　中華書局二〇〇九年
(46) 晁公溯と釈行海の詩の引用はすべて『全宋詩』（北京大学出版社一九九五年）による。
(47) 『懐風藻』と『文華秀麗集』の引用はすべて小島憲之校注『懐風藻・文華秀麗集・本朝文粋』（日本古典文学大系　岩波書店一九七一年）による。
(48) 大曽根章介・金原理・後藤昭雄校注『本朝文粋』新日本古典文学大系　岩波書店一九九二年
(49) 『粟田左府尚歯会詩』はすべて群書類従第九輯『粟田左府尚歯会詩』（続群書類従完成会一九二八年）による。
(50) 『類聚句題抄』の引用はすべて本間洋一『類聚句題抄全注釈』（和泉書院二〇一〇年）による。
(51) 小島憲之『国風暗黒時代の文学中（中）』　塙書房一九七九年
(52) 小島憲之『国風暗黒時代の文学下Ⅰ』　塙書房一九九一年
(53) 群書類従第九輯　続群書類従完成会一九五九年

(54)「霜台」というのは、弾正台のことであり(『大漢和辞典』)、大江匡衡は永観二年(九八四年)に弾正少弼になったことがあるので(後藤昭雄『大江匡衡』人物叢書　吉川弘文館二〇〇六年)、ここでの「霜台」は自分を指していると理解する。

(55) 同注(51)。

(56) 佐々木信綱編『日本歌学大系四』風間書房一九七二年

(57) 羅采元「『三五記』雑考—所収漢詩句をめぐって(一)—」『中世文芸論稿』五　一九七九年

(58)『明月記』国書刊行会　一九七四年

(59)『漢武帝内伝』(原刻景印百部叢書集成　藝文印書館一九六八年)に「母曰此桃三千歳一生」とある。

(60) 稲田徳利「『徒然草』と『宝物集』」『徒然草論』　笠間書院二〇〇八年